

埼玉発世界行き奨学金 留学レポート

氏名: 富澤実留

留学先: エストニア共和国

(10ヶ月: Türi)

私は、2022年の8月から2023年の6月までの約1年間、エストニアのTüriという場所に留学していました。私はこのレポートを通じて、エストニアの魅力やエストニアで埼玉の魅力を伝えるために行った活動について以下の順番でまとめていこうと思います。

- 1、留学団体での出会い
- 2、現地の学校
- 3、音楽学校
- 4、ウクライナ人の友達
- 5、埼玉親善大使として行った活動
- 6、エストニア留学を踏まえての今後

1、留学団体での出会い

私は今回、エストニア留学に行くにあたって EIL という留学団体を利用しました。エストニアには EIL の姉妹団体で ASSE という団体があり、そこには各国から集まった留学生たちと最初に3泊4日のオリエンテーションが行われました。

ここでは、簡単なエストニア語の授業や国際交流、エストニアの歴史を主に学びました。その時に会った留学団体のローカルコーディネーターや他国からの留学生は留学中にしばしば一緒に旅行に行ったりなどのイベントがあったりしました。旅行ではエストニアから近いフィンランドやラトビアを訪れたりしました。



2、現地の学校

9月になると現地の学校がスタートしました。私は10年生（日本の高校1年生）に所属していました。初めは言語や学校のシステムがわからず混乱していましたが、エストニア人の友達が丁寧に説明してくれたり、エストニア全体で使われている Stuumium という学校情報配信サービスの使い方を教えてくれたりしたので、学校のシステムに戸惑うことがなく、学校生活を送ることができました。Stuumium では学校の時間割の変更や、授業内容、成績、受ける授業の出欠を確認できたりします。

また、授業内容についていけないと感じた時は、学校長に相談して留学生の私でもわかるような授業に変えてもらうことができました。

その他にも私が通っていた学校では学校イベントの多くを12年生主体で開催しており、生徒も先生も楽しんでいる様子をよくみることができました。

3、音楽学校

私はエストニアで現地の学校と並行して音楽学校にも通っていました。日本で7年間フルートを習っていたこともあり、飛び級で7年生（音楽学校の最高学年）に入れていただきました。音楽学校ではエストニアの曲を練習したり、発表会や卒業試験のための練習を主に行っていたりしました。卒業試験の際にはエストニアの曲と日本の伝統的な曲をそれぞれ一曲ずつ演奏しました。音楽は世界共通です。エストニアに行き、そこで音楽をやったことによってエストニアの人と繋がることのできただけでなく、他の国からの留学生とも音楽で繋がることができました。

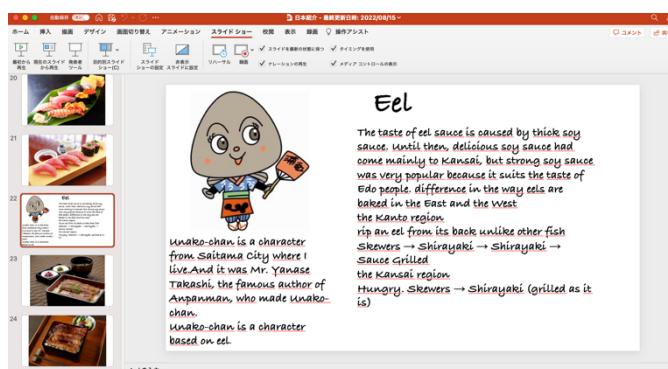
4、ウクライナ人の友達

私が行っていた学校にはウクライナ人の移民がいました。その子とはクラスは違ったものの、留学生同士だった為同じエストニア語のクラスをとっており、とても仲良くなりました。また、留学中にその子と話しているとロシアとウクライナの戦争について考えることが増えました。ウクライナの住民がロシア人をどのように思っているのか、日本にいてニュースを聞くより、当事者の話を聞く方が戦争について深く考えることにつながりました。また、友達がそのような場面に直撃していることもあり、他人事ではなくなったと同時に今まで日本で起きた戦争や犠牲になった地域や人について知っておかなければならないと感じました。

5、埼玉親善大使として行った活動

私はエストニアに行き、埼玉に馴染みのある鰻のタレを使った料理をホストファミリーに教えたり、ホストファミリーにパワーポイントを見せたり、自分の住んでいる地域の説明や人口、

英教育が日本の中でトップレベルであることや、日本がエストニアを見習った方がいいことなどもエストニア人の友達とディベートしたりなど、エストニアとドイツ、ウクライナ、埼玉を多く含む日本の情報をお互いに伝え合ったりしました。



6、エストニア留学を踏まえての今後

エストニア留学を通し、様々なことを学びました。中でも私が一番考えさせられたことはウクライナとロシアの問題でした。日本は唯一世界で原子爆弾を落とされた国です。しかしながら、現代に戦争の恐ろしさ、原子爆弾を落とされた地域の悲惨さを語り継ぎ、もうこれ以上全ての国で第二次世界大戦での日本のような悲しい思いをする人がいなくなるように活動する人は日本にどれほどいるのでしょうか。そして、世界にはまだ 12520 個もの核弾頭が存在します。世界に本当の意味で核の恐ろしさを知っている人はどれほどいるのでしょうか。広島県、長崎県の被害者の方、当事者の方、核弾頭製作時に実験で犠牲になった地域の方々など核の犠牲になった人々の思いを私たち次の世代の人間が紡いでいかなければならないと感じました。そのため私は、第二次世界大戦と現在のウクライナとロシアの戦争を重ね戦争の恐ろしさ、虚しさを伝えられるように、この留学を通して私が考え、感じたことに重きを置いてこれからも活動していこうと思います。